「小さな親切」運動をテーマにしたドキュメンタリーを制作

高校生が伝える〝ちいしん〟の魅力

「活動をする上で、大切にしていることは何ですか」
「ぼくたち高校生にできる親切は何ですか」と、
松戸支部（事務局：松戸商工会議所）の**渡邉千代子**代表に
マイクを向けているのは、**専修大学松戸高等学校**（千葉県）2年、
放送部の**田中陽太郎**さん。1年生の**山本優稀**さんは、
カメラの角度、音声などをチェックしながら撮影を見守ります。

近年、甲子園出場など野球部の活躍が記憶に新しい専修大学松戸高校。スポーツだけでなく英語教育などにも力を入れる文武両道の進学校で、運動が発足した昭和38（1963）年に生徒会が決議し団体加入した〝親切伝統校〟でもあります。校内に「小さな親切」運動委員会を設け、長年にわたり募金活動や地域の清掃活動などに取り組んでいます。

（右から）渡邉代表、田中さん、山本さん、顧問の石倉先生

放送部は今年、「第36回千葉県高等学校文化連盟放送コンテスト」に挑戦するにあたり、「小さな親切」運動をテーマにしたドキュメンタリーを出品することにしました。「小さな親切」運動は生徒たちに〝ちいしん〟と呼ばれるほど親しまれているものの、一般的にはあまり知られていないためテーマに選んだとのこと。

さっそく同じ市内で活動をする松戸支部へ取材を申し込み、事務局のある松戸商工会議所でインタビューが行われました。

学生時代は放送部だったという渡邉代表。しかも娘さんが同校の卒業生というご縁もあり、和気あいあいと取材がスタート。とはいえ、いざカメラを向けられると緊張してしまい、少し言葉に詰まってしまったことを気にする渡邉代表に、田中さんは「大丈夫です。その方がドキュメンタリーの感じが出ていいですよ」と、優しい言葉をかけていました。

また、埼玉県から通学する山本さんは、小学生の時に姉妹で「小さな親切」作文コンクールに応募し、入賞した思い出を話してくれました。おかげで、徐々にリラックスした雰囲気になり、無事撮影は終了。

まずは11月下旬、千葉県のコンテストに出品し、優秀作品は全国大会へと進みます。

本誌が発行される頃は、動画編集の最後の追い込みでしょうか。高校生の若い感性がどのように「小さな親切」運動を伝えてくれるのか、私たちも楽しみです。健闘をお祈りしています。

インタビューの様子